

脇田遺跡出土の金属器生産関連遺物について

— 『脇田遺跡の研究』補遺編その1 —

真 鍋 成 史
森 貴 教
繰 納 民 之
青 柳 泰 介

目次

| | |
|------------------|----|
| I. はじめに | 3 |
| II. 金属器生産関連遺物の検討 | 9 |
| III. 砥石の検討 | 11 |
| IV. 鉄器の検討 | 14 |
| V. まとめ | 23 |

論文要旨

本稿では、奈良県葛城市に所在する脇田遺跡の第2次調査で出土した遺物のうち、前稿（神庭滋ほか 2019「脇田遺跡の研究」『研究紀要』第23集 由良大和古代文化研究協会）で一部報告した金属器生産関連遺物に焦点を当てて、その意義を考察するための基礎作業をおこなった。

金属器生産関連遺物を①鞆羽口、埴埴・発泡土器、鉄滓など、②砥石、③鉄器に分けて整理した。その結果、脇田遺跡では4世紀末・5世紀初頭～7世紀代にかけて、鉄器生産が継続した可能性を指摘した。また、埴埴・発泡土器の検討から、7世紀代における小型銅器の生産の可能性も指摘した。さらに、近接する寺口忍海古墳群との比較検討から、5世紀代に遡る馬具生産の可能性も指摘した。

以上の成果は、従来から重要であると指摘されてきたが、実態が不明であった、脇田遺跡における鉄器（金属器）生産が、大型集落である布留遺跡や南郷遺跡群での生産に匹敵する可能性を提示できたといえる。

ただし、砥石の分析からは、金属器生産を支持できるものの、大規模な生産を想定できないとのことなので、今後も継続して分析を続け、古墳時代における金属器生産の実態に迫っていきたい。

真鍋 成史（まなべ せいじ）

交野市教育委員会社会教育課 課長

森 貴教（もり たかのり）

新潟大学研究推進機構超域学術院 助教

繰納 民之（そうのう たみの）

同志社大学文学部 学生

青柳 泰介（あおやぎ たいすけ）

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 係長

I. はじめに

脇田遺跡は、奈良県葛城市所在の縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。葛城地域を代表する集落遺跡の一つであるが、特に、古墳時代から古代にかけての金属器生産関連遺物が出土することで知られてきた。しかしながら、その内容について知る術は、概要報告書¹⁾以外にはなかったため、遺物についての具体的な内容については、ほとんど知られてこなかった。

そこで、神庭滋氏を代表とし、筆者も含めた数名で7年かけて遺物の再整理をすすめ、2019年に遺物の再整理報告を済ませたばかりである²⁾。ところが、縄文時代～中世にかけての土器、瓦などについての報告については問題なく完了できたものの、筆者が再整理を担当した金属器生産関連遺物については、鉄滓や鉄器の図を提示できず、不十分な内容に終わってしまった。

そこで本稿では未提示の図の掲載と、専門家に依頼した金属器生産関連遺物についての内容補足や再評価について記す。金属器生産関連遺物全般については真鍋成史(Ⅱ)、砥石については森貴教(Ⅲ)、鉄器については線納民之(Ⅳ)によるものがある。なお、遺物番号については、前稿を踏襲するが、報告できなかった新たな遺物については、続き番号を付して報告する。また、土坑SX06出土の鞆羽口群の報告や、鞆羽口や発泡土器などについての理化学分析などについては、来年度以降に報告予定である。

以下に図を掲載する鞆羽口と鉄滓については、前稿で写真図版と遺物観察表を提示しているため、詳細はそちらを参照していただきたい。

まずは、鞆羽口についてであるが、6群に分類した³⁾。i～iii群は5世紀代に属すると考えられ、i群が粗い胎土の大型品で古相を呈し、i群からiii群へと胎土が洗練され、形態もハ字形から筒形へと変化し、小型化していく。iv群は6～7世紀代に属すと思われる、形態は筒形を呈し、先端部のガラス化が顕著である。凶化した2点は、この群に属す(図1)。v群は7世紀代以降に属す、形態が筒形を呈し、長さが10cmを超えるグループである。vi群は銅成分を検出したグループで、形態的特徴はiv群に近い。

次に、鉄滓(図2～6)についてであるが、重量と時期により3群に分類した⁴⁾。i群(100g以下の小型品、5世紀以降)は、G83、84、87、92、93、96、100、102、105、109、113、116、117、120、124の15点、ii群(101～300gの中型品、6世紀以降)は、G77～81、85、86、88、90、91、94、95、97～99、101、103、106～108、110～112、114、115、119、121～123、125～131、156の38点、iii群(301g以上で厚みが3.5cm以上、7世紀以降)は、G82、89、104、118の4点になる。

なお、鉄滓i群は鞆羽口i～iii群、鉄滓ii群は鞆羽口iv群、鉄滓iii群は鞆羽口iv～vi群と対応する可能性が高い。

鉄滓・鞆羽口の形態別分布表を以下に掲げる(表1)。I群は調査区北部、II群は調査区中央部、III群は調査区南部に該当する⁵⁾。

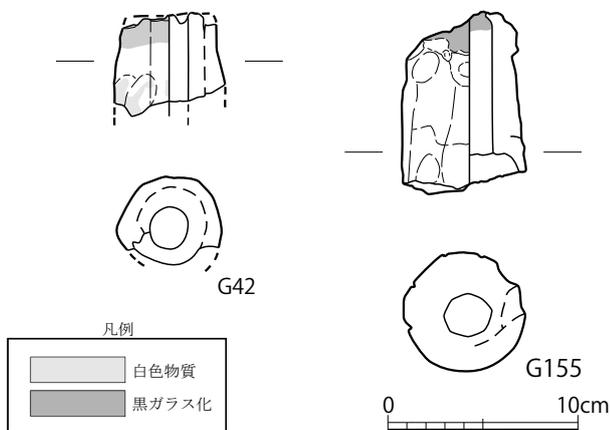


図1 脇田遺跡出土鞆羽口 (S=1/4)

表1 脇田遺跡出土鉄滓・鞆羽口形態別分布表

| | I | II | III |
|-----------|------------|--------------|------------|
| 鞆羽口 i 群 | 0 | 2 | 0 |
| 鞆羽口 ii 群 | 0 | 3 | 2 |
| 鞆羽口 iii 群 | 0 | 4 | 2 |
| 鞆羽口 iv 群 | 1 | 9 | 2 |
| 鞆羽口 v 群 | 1 | 3 | 1 |
| 鞆羽口 vi 群 | 0 | 3 | 1 |
| 鉄滓 i 群 | 0 | 9 [556.3g] | 2 [81.0g] |
| 鉄滓 ii 群 | 4 [392.3g] | 16 [1825.3g] | 6 [703.3g] |
| 鉄滓 iii 群 | 0 | 3 [449.1g] | 0 |

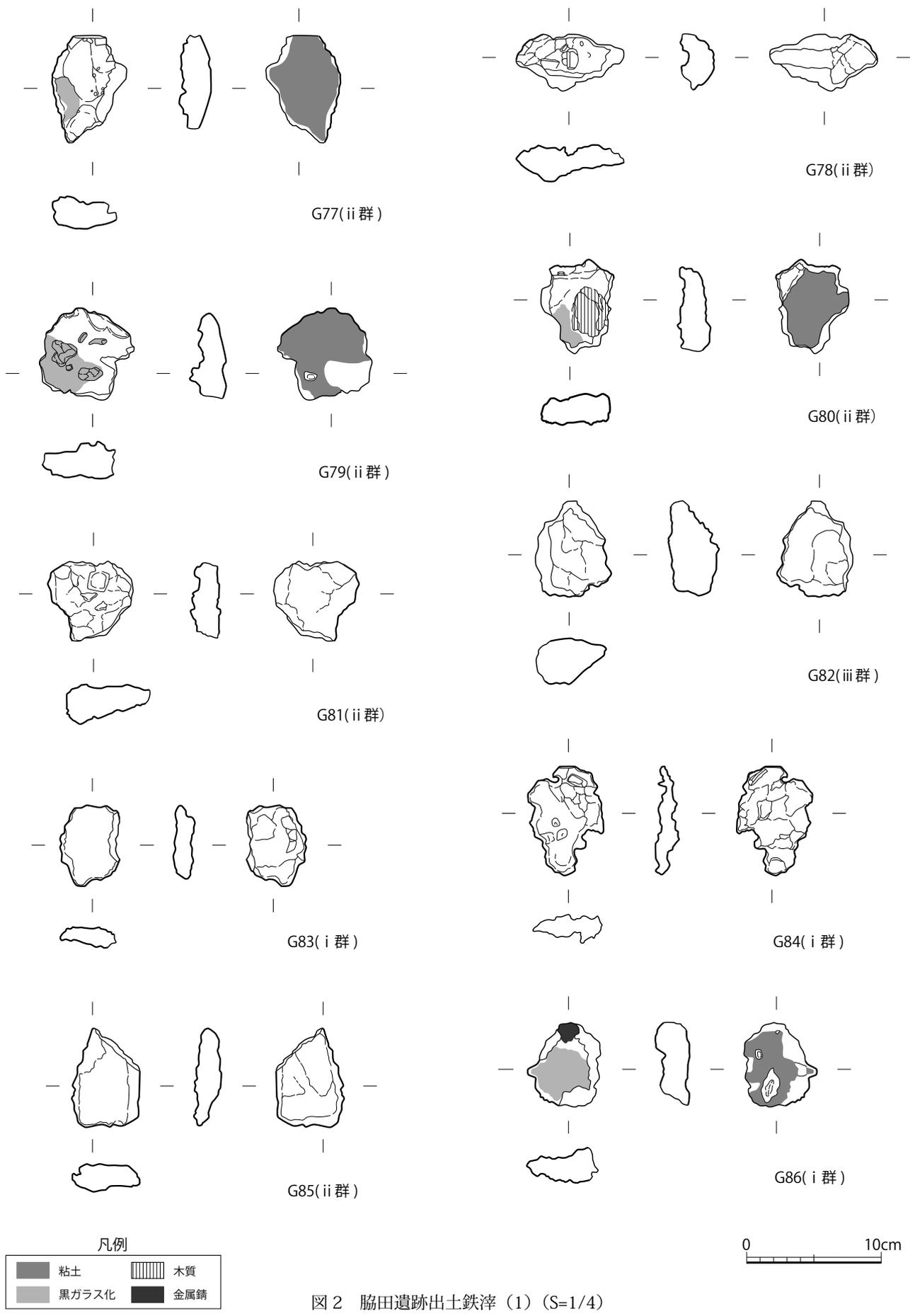


図2 脇田遺跡出土鉄滓(1)(S=1/4)

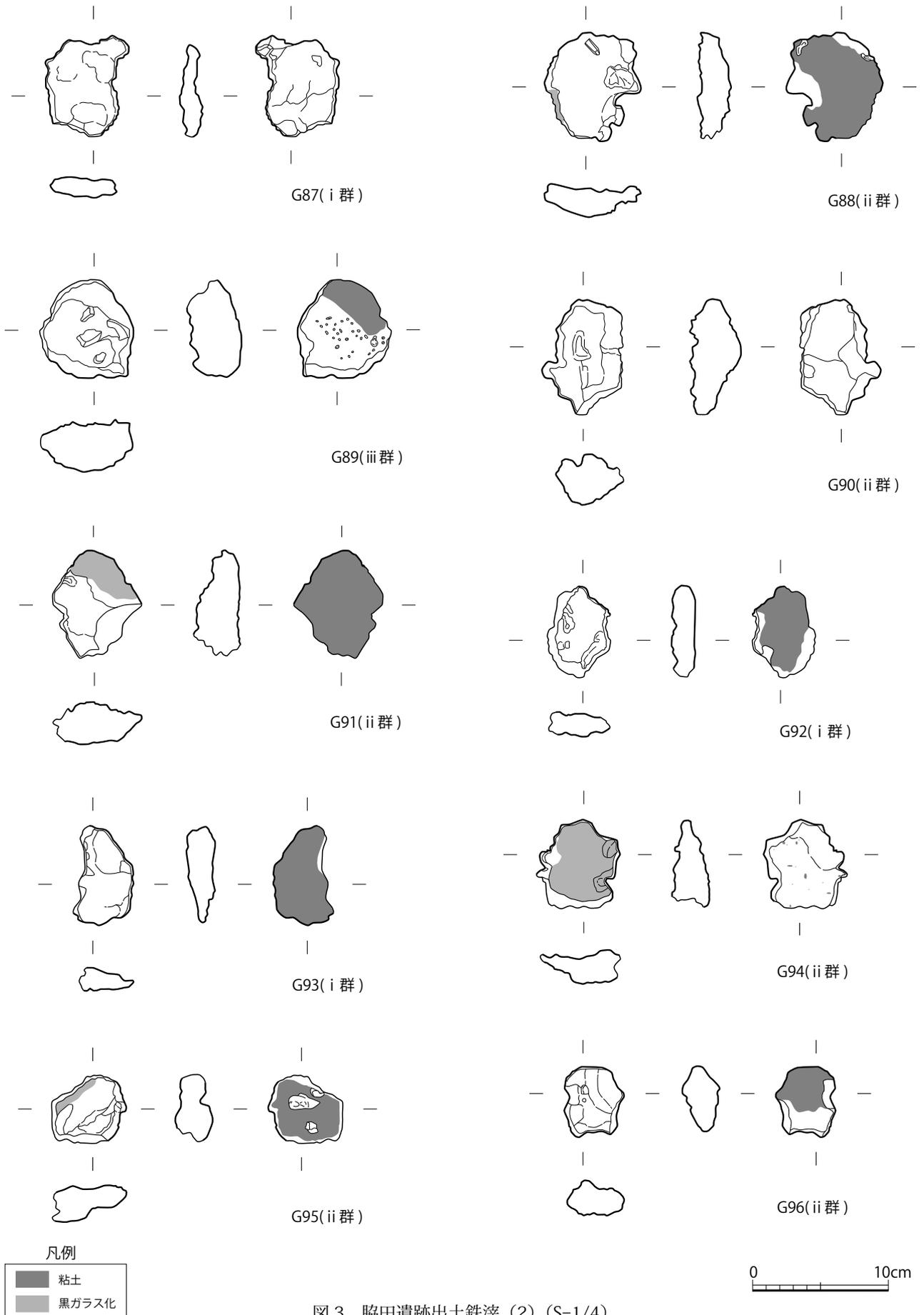


図3 脇田遺跡出土鉄滓(2)(S=1/4)

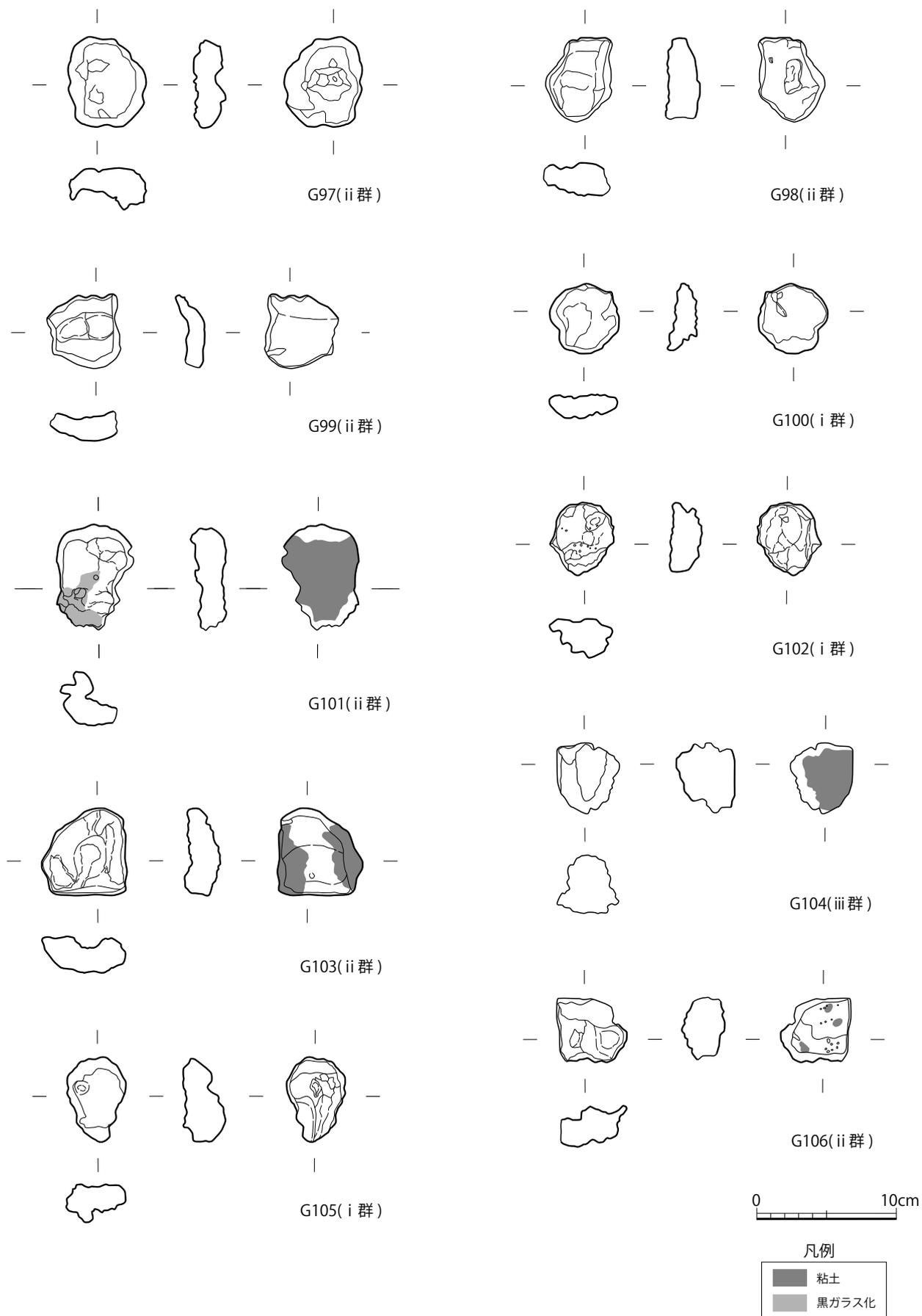


図4 脇田遺跡出土鉄滓(3) (S=1/4)

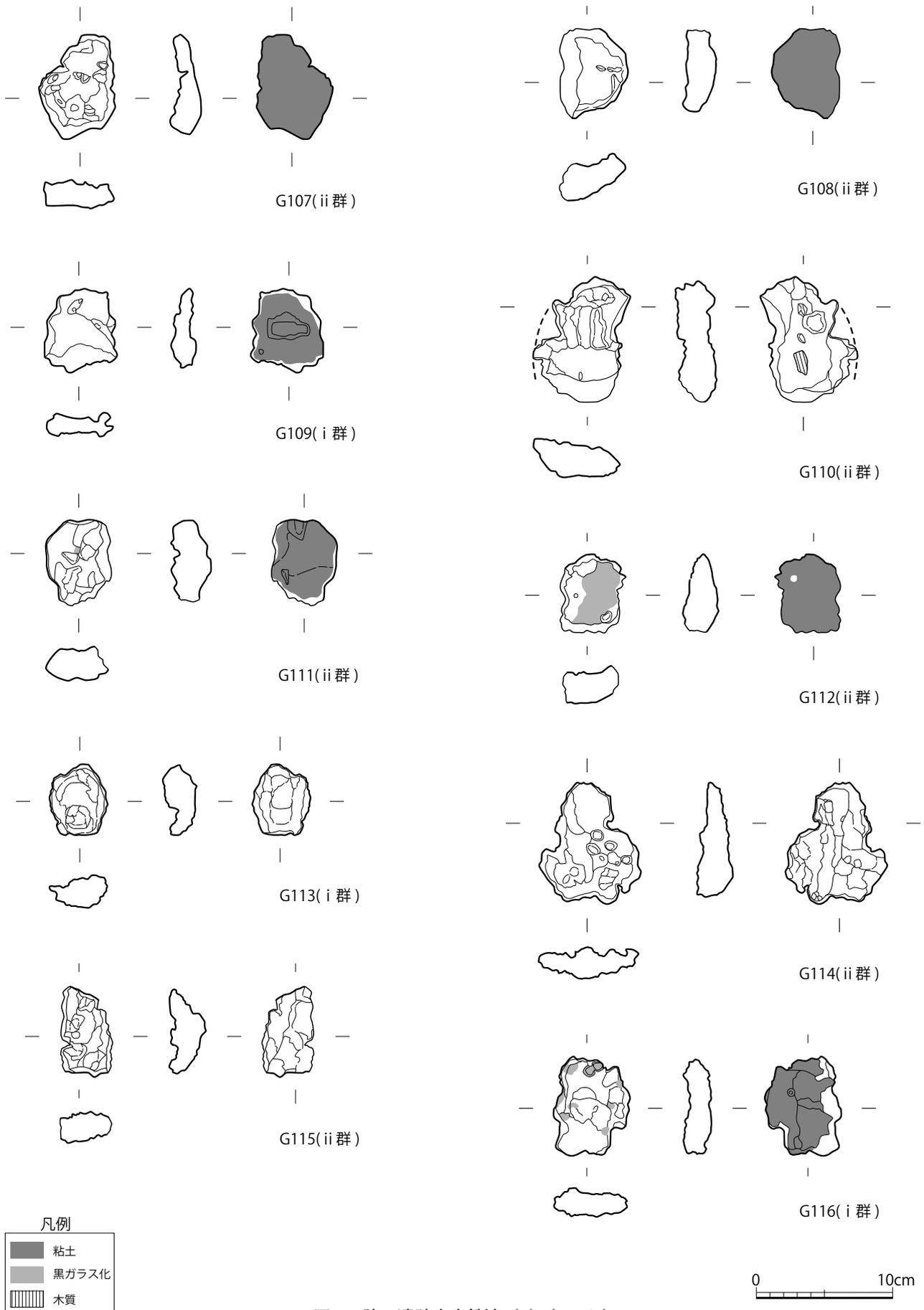


図5 脇田遺跡出土鉄滓(4)(S=1/4)

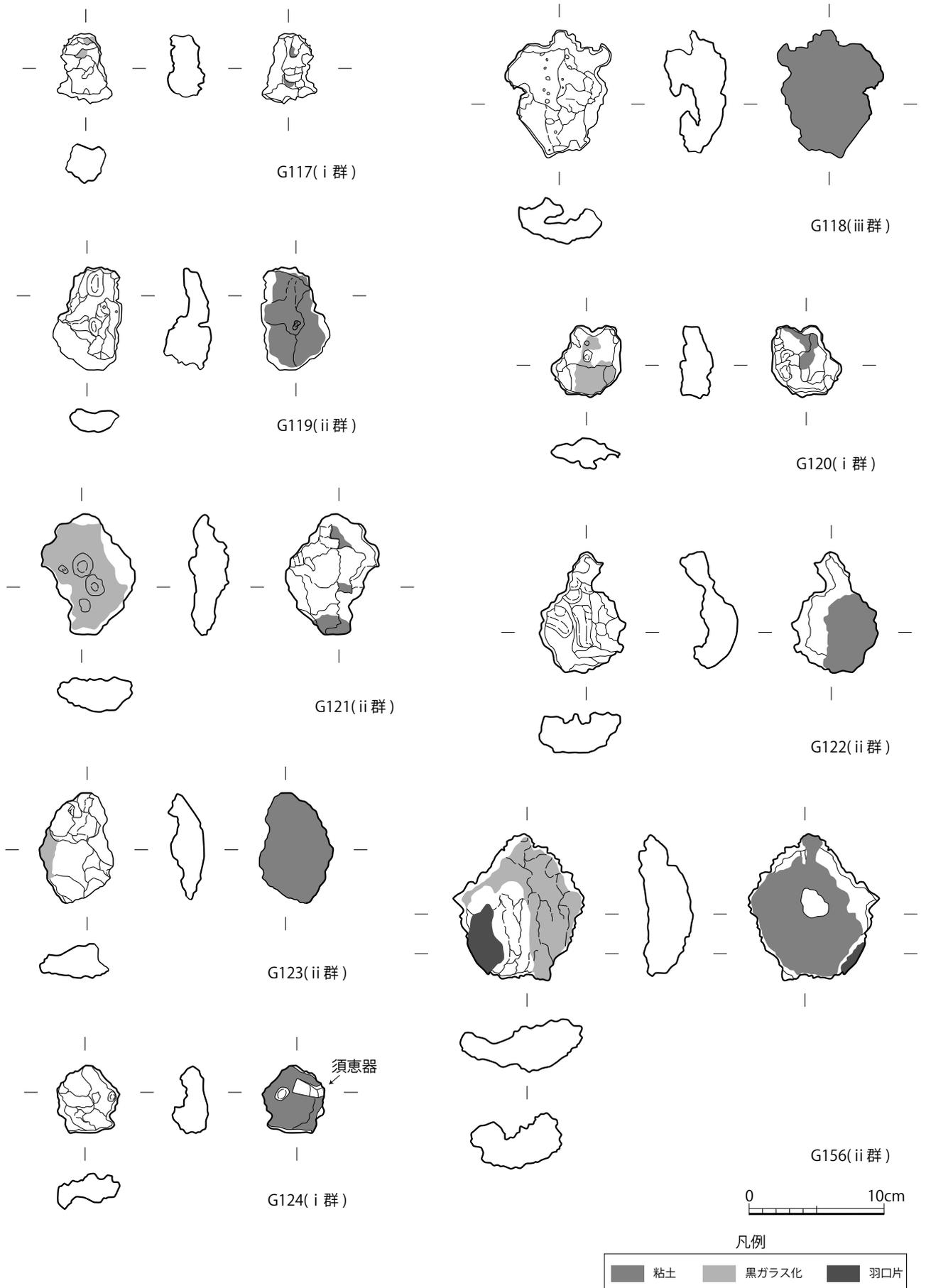


図6 脇田遺跡出土鉄滓(5) (S=1/4)

II. 金属器生産関連遺物の検討

(1) 検討する資料の確認

検討する資料は、前稿の「II. 脇田遺跡第2次調査出土品、7 金属器生産関連遺物」で青柳が報告した中で、本稿の森・繰納が検討した資料を除く、観察記録化された鞆羽口43点、埴埜・発泡土器14点、鉄滓56点、銅滓2点、炉壁3点の合わせて118点である。

(2) 資料の検討結果

①羽口

羽口は考古資料大観に従って分類する⁶⁾(図7)。

i 群(G 1・G 2)はいわゆる複式羽口でII類である。大型のII a類(G 1)は奈良県東紀寺遺跡出土資料(図8-1)に近く、植物遺体の圧痕の多さが目立つことも似ている。大阪府百舌鳥陵南遺跡からも同様の羽口が出土している。やや小型のII b類(G 2)は大阪府大泉遺跡のものに似ている。

ii 群(G 3~8)は単式羽口であるが器壁もやや厚く、大型のI a類の羽口から小型のI b類に移行する時期にあたる。I a類としては奈良県纏向遺跡を初見に、奈良県南郷遺跡群・布留遺跡、大阪府神並遺跡・縄手遺跡・鬼塚遺跡・森遺跡でも確認しているが、それらよりは脇田遺跡出土資料は小ぶりであることから時期の新しい資料と思われる。

iii 群(G 9~15)はI b類の羽口であるが、概して短い。類例としては5~6世紀代の羽口、分布としてはいわゆる畿内地域に中心があり、「畿内型羽口」とも呼べようか。畿内地域を出るとII類の羽口が多く、またその外縁には転用羽口が広く分布している。

ハ字形(G 9・13)と、筒形(G10~12・14・15)があり、時間経過を示すものと考えられる。

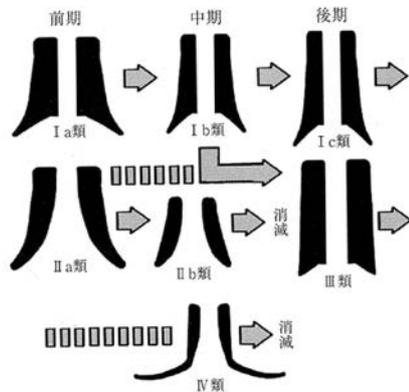


図7 古墳~飛鳥時代の羽口の変遷

iv 群(G16~30・42・155)はI b類の羽口がより高温化のため、先端部の溶解が激しく、また筒形となり、中には先端部が切り落として使われたもの(G16・17)もある。6~7世紀代の羽口と考えられる。脇田遺跡の中でも最も出土量の多い羽口といえよう。先端部を切り落として使う例は森遺跡をはじめよく見かける。炉が小型化して高温化が進んだことを示している。

完形のもの(G155)は大阪府田辺遺跡例に似ている。南郷遺跡群の主体もこのiv群である(図8-2~4)。

v 群(G31~36)はI c類もしくはIII類の羽口である。7世紀以降が推定される。長さも最終使用長が12cmを超えている。これは炉の大型化によるものと考えられる。しかし、後端部がそれまでのソケット状ではなくなったものも多く、同時期の畿内地域の鍛冶羽口とは異なった様相を示す。

vi 群(G37~40)は銅関係の羽口である。先端部のガラス化した色調が鉄由来の黒色ではなく、銅由来の緑色であったり、質感も異なっていたことに加えて、蛍光X線分析でも銅成分を検出できている。同様の事例は5世紀後葉の群馬県三ツ寺I遺跡に確認できている。

②埴埜・発泡土器

埴埜(G43~51)・発泡土器(G52~56)はいずれも7世紀代に属するものである。この埴埜や発泡土器は羽口vi群やiv群でも小型品(G18・21)のほか、銅滓(G150・151)との関連が伺われる資料群である。

同様に奈良県飛鳥池遺跡からも7世紀中葉から藤原宮期にかけての専用(図9-16~19)と転用(図9-15)の異なる2種類の埴埜が確認されている。

脇田遺跡の専用埴埜は飛鳥池遺跡例に比べて小型で内容量も少なく、小型品の鑄造向きであったと思われる。

土器を転用したと思われる埴埜は、丹羽崇史氏の集成表⁷⁾中より確認したところ、奈良県の6世紀前葉から中葉の布留遺跡(図9-5~8)、6世紀後葉から7世紀初頭の奈良県上之宮遺跡(図9-14)で同様の器壁の薄いものが確認されている。

土器転用の埴埜であるが、すでに4世紀代の大阪府垂水遺跡から、溶解途中の銅鏡や銅鏃と一緒に小型丸底壺を転用した例が報告されている(図9-1~4)。続く5世紀後葉の三ツ寺I遺跡でも甕の底部を転用したのも認められる(図9-10・11)。

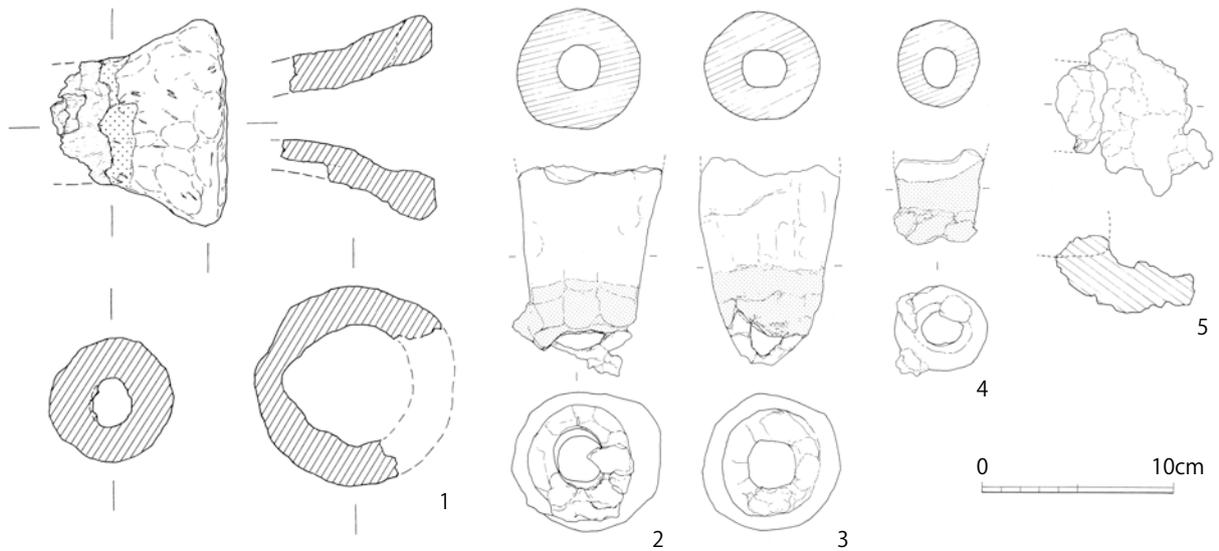


図8 羽口関係資料 (S=1/4)
 1: 東紀寺遺跡、2~5: 南郷遺跡群下茶屋カマ田遺跡

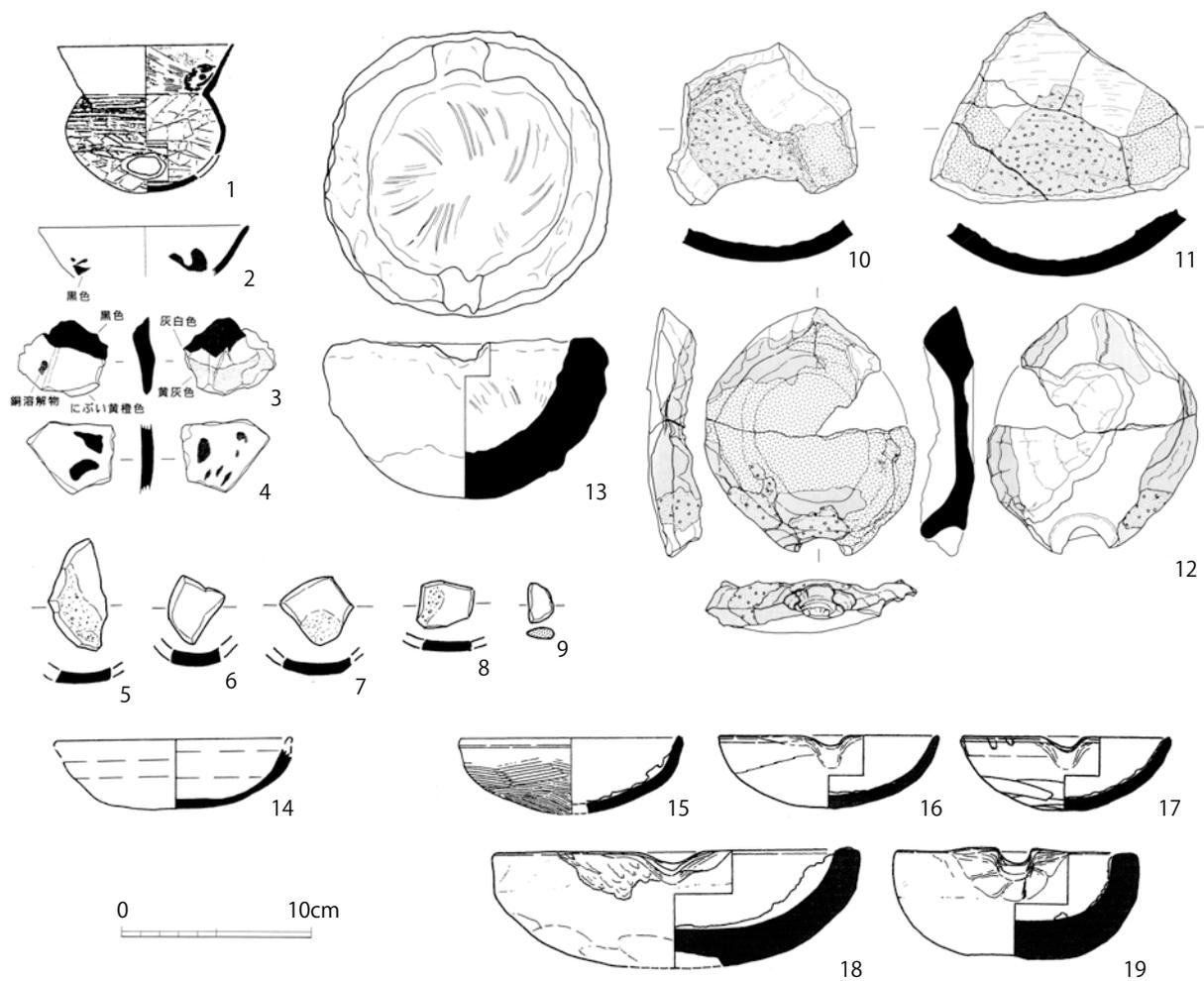


図9 埴塼関係資料 (S=1/4)
 1~4: 垂水遺跡、5~9: 布留遺跡内(樋ノ下・ドウドウ) 地区
 10~12: 三ツ寺I遺跡、13: 鬼塚遺跡、14: 上之宮遺跡、15~19: 飛鳥池遺跡

専用坩堝であるが、確実な資料としては三ツ寺 I 遺跡のもの（図 9-12）があるが、鬼塚遺跡からも 6 世紀前葉の専用坩堝（図 9-13）が報告されている。法量も大きい。

③鉄滓

鉄滓は i 群が重量 100g 以下で 5 世紀代が中心、ii 群が 101～300g で 6 世紀代以降、iii 群が 301g 以上でかつ厚みも 3.5cm を超えるもので 7 世紀以降としている。これは炉内で半溶融状態の鉄滓が生成されるだけの高温域が広がったため、時代を追って鉄滓が大型化していったことを示している。これは羽口の i～vi 群の形状変化とも連動している。

炉内の高温化が進むとそれまでと比べて羽口の消耗が激しくなった。その痕跡は鉄滓の上面に残る黒色ガラス質滓や剥落した羽口片である。先にも述べたが iv 群の羽口と対応するもので、一般的には 5 世紀代の羽口に多いが、6 世紀以降も確認できる。

その多くは、ii 群で確認され、12 点（G77・79・80・86・91・95・99・101・112・121・126・156）を数える。i 群中にも 1 点（G120）含まれており、この滓は 6 世紀以降の鍛冶作業の後工程時に生成された可能性がある。また上面に薄くガラス質滓が付着するもの（G116）は、i 群から ii 群への過渡期的様相といえる。南郷遺跡群でもよく確認できる（図 8-5）。

iii 群の鉄滓は大きさに比例して厚さもある。IV 区出土の鉄滓は厚さが 4.3cm、完形ならば重さが 600g を超えるもので、精錬鍛冶滓の可能性が考えられる。同様の鉄滓は布留遺跡、大県遺跡、田辺遺跡、森遺跡や岡山県窪木薬師遺跡などやはり 6 世紀後葉以降で見られる。そのほか、SX06 からは v 群の羽口と一緒に銅含みの含鉄鉄滓も出土している。

④その他

銅滓（G150・151）は、滓含みの銅塊といえるものである。畿内地域における 7 世紀代の同様の銅塊は上之宮遺跡や田辺遺跡で確認されている⁸⁾。脇田遺跡からは布留遺跡出土の銅滓（図 9-9）のような鉍滓は、再整理では抽出できなかった可能性もある。

炉壁（G152～154）は資料が破片であり、詳細は不明だが、鍛冶炉もしくは鑄造に伴う溶解炉の可能性が考えられる。

(3) 南郷遺跡群・寺口忍海古墳群との関連

南郷遺跡群と脇田遺跡との異同であるが、南郷遺跡群の羽口は iii・iv 群が主体で v 群の羽口は認められていない。また iii 群の鉄滓が少ないこともあげられる。これは南郷遺跡群が 7 世紀代までには操業が下火になっていることに起因している。

寺口忍海古墳群の供献鉄滓類の副葬時期は 6 世紀中葉以降であり、脇田遺跡における鍛冶生産が行われている期間内である。古墳群出土の供献鉄滓とされるものの中には鉄塊が多く含まれる。この鉄塊は塊錬鉄と考えられ、国内での鉄生産開始と関連する。鉄塊の国内流通開始と iv 群の大型羽口と iii 群の大型滓との関連が伺える。

(4) 小結

以上のように、砥石を除く金属器生産関連遺物を検討した。脇田遺跡の鍛冶生産の開始は、当初は 6 世紀後半だとされたが⁹⁾、その後は見直しが行われ 5 世紀後半の可能性が指摘された¹⁰⁾。

しかし、今回再検討した結果、生産の開始期であるが東紀寺遺跡出土と類似の i 群羽口の存在から従来よりもさらに遡ることは確実で、遅くとも 4 世紀末～5 世紀初頭としてよかろう。

また操業の終わりも 8 世紀とされていたが、平城京で見られるようにさらに大型の羽口もないことなどから、7 世紀代に収まりそうである。

III. 砥石の検討

(1) 資料の報告（図 10、表 2、写真 1・2）

出土砥石は、金属器を主とした利器の刃先の日常的な研磨のほか、金属器生産や玉作りの加工具としても用いられたと考えられる。以下、計 22 点について報告する。

G57 は大型の定形砥石（置砥）である。砥面は 4 面で、横断面形は台形である。1 面のみを仕上砥として用いており、他の 3 面は粗砥である。G58 は定形砥石（置砥）の端部破片である。横断面形は台形である。G59 は小型の定形砥石（手持砥）の破片である。端部に顔料とみられる付着物がわずかに認められる。使用痕 G がみられる¹¹⁾。横断面形は長方形で、縦断面形は鞍状に湾曲する。G60 は定形砥石（置砥）の破片である。横断面形は方形である。G61 は定形砥石（手持砥）の破片である。使用痕 C1v が 2 条認め

られ、痕跡の長さは8mm、20mmを測る。鉾物が抜けた穴が目立つ石材を用いる。G62は定形砥石(手持砥)である。使用痕C1vが多数認められる。使用痕は砥面の長軸方向ではなく、破損面との境界部分で何度も刃先をこすりつけたような痕跡である。痕跡の長さは短いもので15mm、長いもので40mmを測る。G63は定形砥石である。端部に幅7mmの断面U字状痕が3条みられ、使用痕C1vも多数みられる。痕跡の長さは27mmである。G64は定形砥石(置砥)である。長軸方向に幅3.5mmの筋状痕が2条認められ、玉砥石と考えられる。鏝状付着物とタール状付着物がみられる。G65は不定形砥石(手持砥)である。幅7mm、8mmの断面U字状痕がそれぞれ1条認められ、玉砥石と考えられる。G66は不定形砥石(手持砥)である。使用痕E1u、E1コ、C1コが複数認められる。玉もしくは金属以外を対象とした研磨痕の可能性はある。G67は不定形砥石(手持砥)である。砥面の端部に幅20mm、長さ18mmの範囲でタール状付着物が認められ、付着物の表面に擦痕がみられる。G68・G69はサイコロ状の定形砥石(手持砥)である。G70は平面三角形を呈する定形砥石(手持砥)である。使用痕E1uが1条認められるが、凹部は非常に浅く不明瞭な痕跡である。G71は定形砥石(手持砥)の破片で、破損面を砥面に再生している。G72はサイコロ状の定形砥石(手持砥)である。G73は定形砥石の破片である。使用痕C1v、Gが認められる。痕跡の長さは約9mmと短く、

砥石端部に利器の刃先をこすりつけたような痕跡である。また面的にタール状付着物がみられる。G74は定形砥石(置砥)の破片である。タール状付着物がみられる。G75は不定形砥石(置砥)の破片である。使用痕RC1vが複数認められる。痕跡の長さは25~30mmである。G76は定形砥石(置砥)の破片である。側辺の長軸方向に使用痕RC1vが複数認められる。G157(A2918)は不定形砥石である。砥面は波打った状態を呈する。G158(A2920)は円礫を素材とした磨石状の不定形砥石である。やや不明瞭な使用痕C1vが不定方向に複数認められる。資料の片側に、面的に広くタール状付着物がみられる。

(2) 砥石目と形態(図11)

砥面によって砥石目(砥粒の大きさ、砥石粒度)の異なる資料が含まれることから(G57・G60・G64・G68)、砥面ごとに砥石目を同定し、その組成をみる。砥石目はサンドペーパーとの比較によって分類した¹²⁾。分類の指標として用いたサンドペーパーは、JIS(日本工業規格) #40(番目、以下省略)、#60、#80、#100、#120、#150、#180、#240、#320、#400、#600、#800、#1000、#1500、#2000の15種類(三共理化学株式会社製)で、#40が最も粗く#2000が最も細かい¹³⁾。砥石目の同定を行うために、手持ちルーペ(Vixen製M13)および携帯型顕微鏡(Kenko Tokina製Do・Nature STV-40M)により、20倍

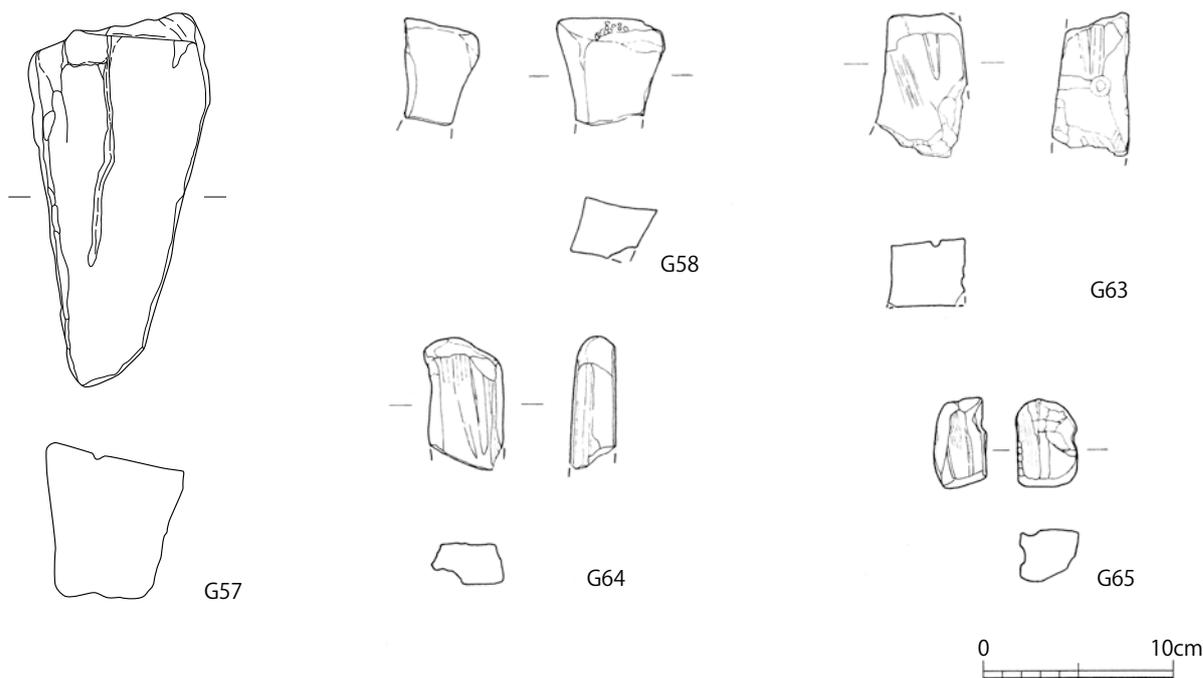


図10 脇田遺跡出土砥石 (S=1/4)

表2 脇田遺跡出土砥石観察表

| 報告番号 | Aランク 遺物台帳番号 | 地区名 | 遺構・層位 | 形態 | 重量 (g) | 砥石目 (#)・砥面数 | 石材 | 溝状痕 | 錆状付 着物 | タール状 付着物 | 被熱 | 光沢 | 備考 |
|------|----------------|---------|-------|-----|--------|------------------|-------|-------|-----------|-------------|----|----|---------------------|
| G57 | 248 | AB28・29 | | 定形 | 2111 | #80×3面、#2000×1面 | 閃緑斑岩 | | | | | ○ | 一面のみ仕上砥、他面は粗砥 |
| G58 | 2941 | B7・8 | SB08 | 定形 | 115.1 | #1000×4面 | 砂岩 | | | | | | |
| G59 | 2978 | A19 | SD024 | 定形 | 13.8 | #2000×4面 | 流紋岩 | | | | | | 赤色顔料付着? |
| G60 | 3065 | B19 | | 定形 | 113.3 | #80×1面、#150×3面 | 砂岩 | | | | | | |
| G61 | 2919 | AB28～30 | I層 | 定形 | 94.1 | #1000×4面 | 流紋岩 | ○C1v | ○? | | | | |
| G62 | 2937 | AB20・21 | SB06 | 定形 | 131.9 | #1000×3面 | 流紋岩 | ○C1v | ○ | | | | |
| G63 | 2893 | B14・15 | | 定形 | 180.1 | #400×4面 | 流紋岩 | ○C1v | | | | | 玉砥石としても使用 |
| G64 | 2905 | B14～19 | | 定形 | 89.6 | #150×1面、#800×3面 | 砂岩 | | ○ | ○ | | | 幅3.5mmの帯状痕あり 玉砥石 |
| G65 | 2872 | A18 | SB07 | 不定形 | 55.6 | #400×4面 | 流紋岩 | | | ○ | | | 玉砥石 |
| G66 | 2888 | AB14～19 | | 不定形 | 25.9 | #2000×3面 | 流紋岩 | ○C1コ | | | ○? | | |
| G67 | 2937 | AB20・21 | SB06 | 不定形 | 63.2 | #600×3面 | 砂岩 | | | ○ | | | |
| G68 | 3086 | A15 | | 定形 | 34.6 | #180×5面、#1000×1面 | 流紋岩 | | | | ○? | | サイコロ状 |
| G69 | 3163 | AB1～5 | | 定形 | 21.6 | #1000×4面 | 流紋岩 | | | | | | サイコロ状 |
| G70 | 3166 | AB6～13 | | 定形 | 45.5 | #320×5面 | 砂岩 | | | | | | |
| G71 | 3261 | B20～28 | | 定形 | 36.1 | #600×3面 | 砂岩 | | ○? | ○? | | | |
| G72 | 3115 | AB22 | | 定形 | 21.2 | #1000×3面 | 流紋岩 | | | ○ | | | |
| G73 | 3103 | AB14～19 | | 定形 | 31.6 | #1000×2面 | 泥岩 | ○C1v | | ○ | | | |
| G74 | 617 | B19・20 | | 定形 | 140.6 | #1000×3面 | 砂岩 | | | ○ | | | |
| G75 | 2948 | A14 | SD001 | 不定形 | 235.1 | #320×1面 | 砂岩 | ○RC1v | | | ○ | | |
| G76 | 3179 | AB20～27 | | 定形 | 102.5 | #2000×3面 | 流紋岩 | ○RC1v | ○? | | | | |
| G157 | 2918 | AB20・21 | SB06 | 不定形 | 299.0 | #120×2面 | アプライト | | | | | | |
| G158 | 2920 | B14・15 | SD058 | 不定形 | 565.0 | #800 | 泥岩 | ○?C1v | | ○ | | | |

～40倍の範囲でサンドペーパーと砥石の構成鉱物粒子の粒径を相互に比較対照した。#40から#120までを粗砥、#150から#400までを中砥、#600以上を仕上砥として便宜的に区分する。砥石目によって研磨対象物に形成される凹凸の深さに差異があり、概ね粗砥・中砥・仕上砥の区分に対応するとされる¹⁴⁾。

形態は定形砥石と不定形砥石に区分する。ここで定形砥石とは「平坦面が互いに稜をなして接しているもの、または加工痕が認められるもの」¹⁵⁾と定義し、それ以外の形態のものを不定形砥石とする。

定形砥石が22点中16点(72.7%)、不定形砥石が6点(27.3%)を占めており、定形砥石が多いことがわかる。なかでも砥石目#1000に74面中24面(32.4%)と最も多く認められ、これは全て定形砥石である。仕上砥が多く、45面(60.8%)を占めている。一方で、粗砥が6面(8.1%)、

中砥が23面(31.1%)確認され、仕上砥に一極化しているわけではないことも注目される。粗砥・中砥は金属器や玉の生産(切削加工)により近い状況で用いられ、仕上砥は鉄器の刃先の研磨や日常的な手入れとして用いられたと考えられる。したがって、本遺跡は単なる消費遺跡としての性格のみではなく、生産遺跡としての機能も有していたといえる。

(3) 使用痕・付着物

砥面の使用痕および付着物(溝状痕、錆状付着物、タール状付着物)の有無を確認する。

まず溝状痕について検討する。溝状痕とは砥面に認められる、幅2mm以下で横断面形がV字状あるいはレ字状を呈する痕跡である。実験による生成過程の検証はされていないが、鉄器を仕上げる際、刃先が接触することにより生じた痕跡と考えられている¹⁶⁾。22点中8点(36.4%)に認められ、砥面としては仕上砥に多くみられる。

錆状付着物は砥石の表面にみられる赤錆状の物質である。埋没した土壤中の鉄分ではなく、鉄器を研磨する際に付着したものとイえる。鉄器表面に生じたバリや鉄分が砥石を構成する鉱物に絡め取られ、水や酸素と反応することで錆状に錆化したものとする。可能性があるものを含めて22点中5点(22.7%)にみられる。

最後にタール状付着物をみる。これは砥面に面的に付着した黒色で粘着質の物質である。可能性があるものを含め

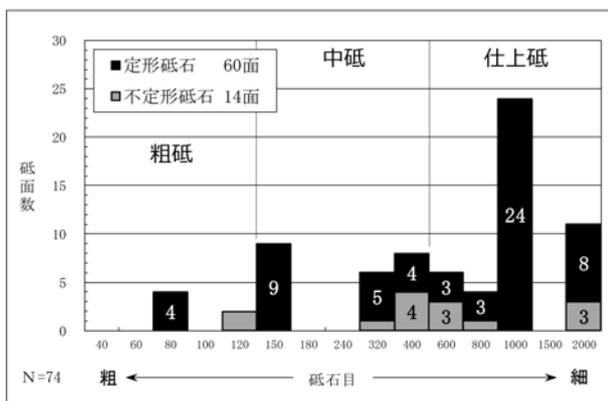


図11 砥石目組成

て8点(36.4%)にみられる。弥生時代の北部九州地域の事例では、タール状付着物がみられる砥石は鍛冶関連遺構が検出されている遺跡で主に確認されることから、鍛冶作業との関係が示唆される¹⁷⁾。

鏑状付着物やタール状付着物の付着過程と鍛冶作業との関連性については今後の課題であるが、本遺跡出土砥石にこうした付着物のみられる砥石が一定量含まれていることは、遺跡における金属器の生産活動との関連性を示唆する。

(4) 法量とセット関係 (図 12)

対象とした砥石は基本的に欠損しており、完形品が少ないため厳密に法量の区分をすることは困難だが、破片によってもおおよその傾向を把握することが可能であると考えられる。重量によって400g未満を小型品、400～1,200gを中型品、1,200～2,000gを大型品、2,000g以上を特大型品に便宜的に区分して、砥石のセット関係を検討する。中型・大型・特大型品は定置して加工対象物を動かして使用した置砥と考えられ、特大型品は運搬頻度が相対的に低かったものと想定する。

小型品が20点(90.9%)を占めており、中型品は1点、特大型品1点と中型・大型・特大型品は非常に少ない。G68・G69・G71・G72のように定形砥石の破片端部を用い、サイコロ状に小型化した手持砥が多く含まれている。

(5) 小結

以上のように、本遺跡出土砥石について砥石目組成を検討した結果、粗砥・中砥が約4割含まれることが明らかになった。このことから、砥石には鍛冶作業などの金属器生産の場面で用いられたものを含むと考えられる。一方で、200g未満の小型品が圧倒的に多いため、砥石組成からは

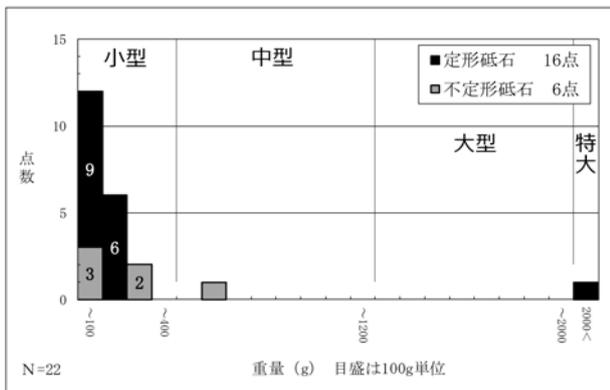


図 12 重量度数分布

鉄器生産の拠点のような遺跡性格は読み取ることが難しい。小型品を主体として仕上砥のみに偏らない組成は、消費地遺跡としての性格と金属器などの生産活動の一端を複合的に反映したものと評価したい。

IV. 鉄器の検討

(1) 資料の報告 (図 13、写真 3・4)

脇田遺跡では多数の鉄器が出土しており、本遺跡における金属器生産に関連する遺物であると考えられる。本章ではその内、器種が判別できる資料を中心に22点報告を行う。資料は、鉄鏃1点、馬具1点、鉄斧1点、鑿・鑿状鉄器6点、鉄釘5点、不明鉄器8点から構成される。資料の中には、出土した遺構・層位が不明なものも多く存在するため、まず器種別に遺物の報告を行った後、調査区・遺構との対応性を踏まえた検討を行うこととする。

鉄鏃 G133は平根系鉄鏃である。鏃身部は完存するが、錆による膨張が甚だしい。腸袂柳葉式であり、茎部が鏃身部に対してやや肥厚する特徴を持つ。

馬具 G132は完形の絞具である。輪金は、断面形が一辺約6mmの角丸方形の材から成り、頭部に幅をもたせるよう「口」字形に曲げ、基部右側で鍛接している。また、輪金基部に棒を巻き付け刺金部としている。

鉄斧 G136は有肩鉄斧である。袋部の上半と刃部の一部が欠損する。袋部の底の位置は判然としないが、X線の観察に拠れば、肩の位置よりおよそ5mm上に位置するようである。刃部は、先端にかけて急に厚みを狭める特徴を持つ。

鑿・鑿状鉄器 本章では、先端に刃部を有する棒状利器を、一括して「鑿・鑿」と呼称し、報告する。身部の断面形が相対的に太型のもの(G137)と、細型のもの(G139・142・146・159・160)が存在する。

G137はほぼ完形であるが、刃部が錆割れによりやや変形する。敲打により頭部が潰れており、鑿と断定できる。刃部下端は撥状を呈し、最大2.3cmまで横に張り出す。

G139・142・146・159・160は、いずれも身部上半が欠損する。G139は身部断面が方形であり、刃部は撥状を呈する。G142は身部断面が方形であり、刃部には肩を有する。側面を見ると、長さ1.5cmに渡って面取りを行い、刃を形成しているようである。G146は身部断面が方形であり、逆台形状の刃部を有する。側面を見ると、長さ6

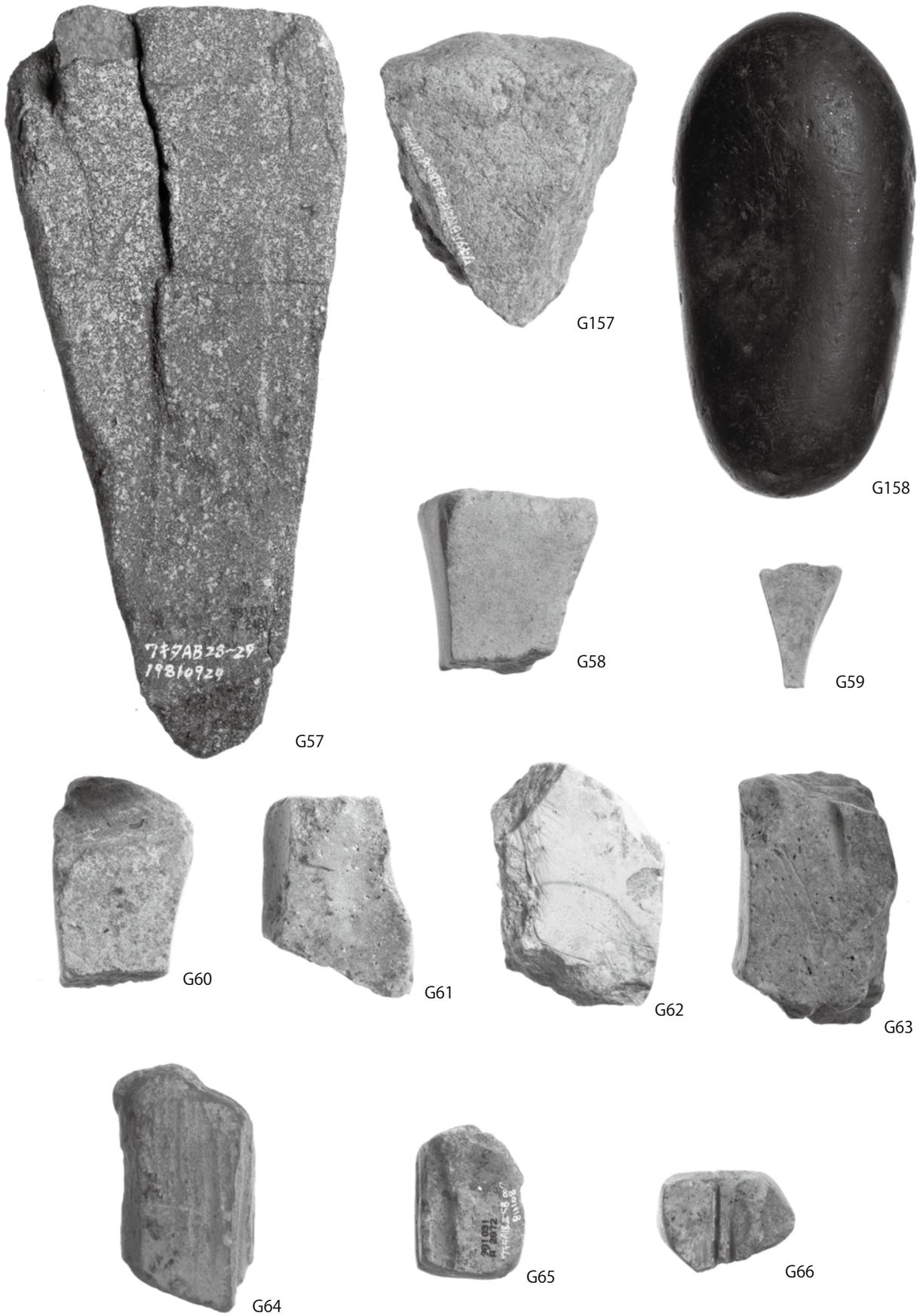


写真1 脇田遺跡出土砥石(1)

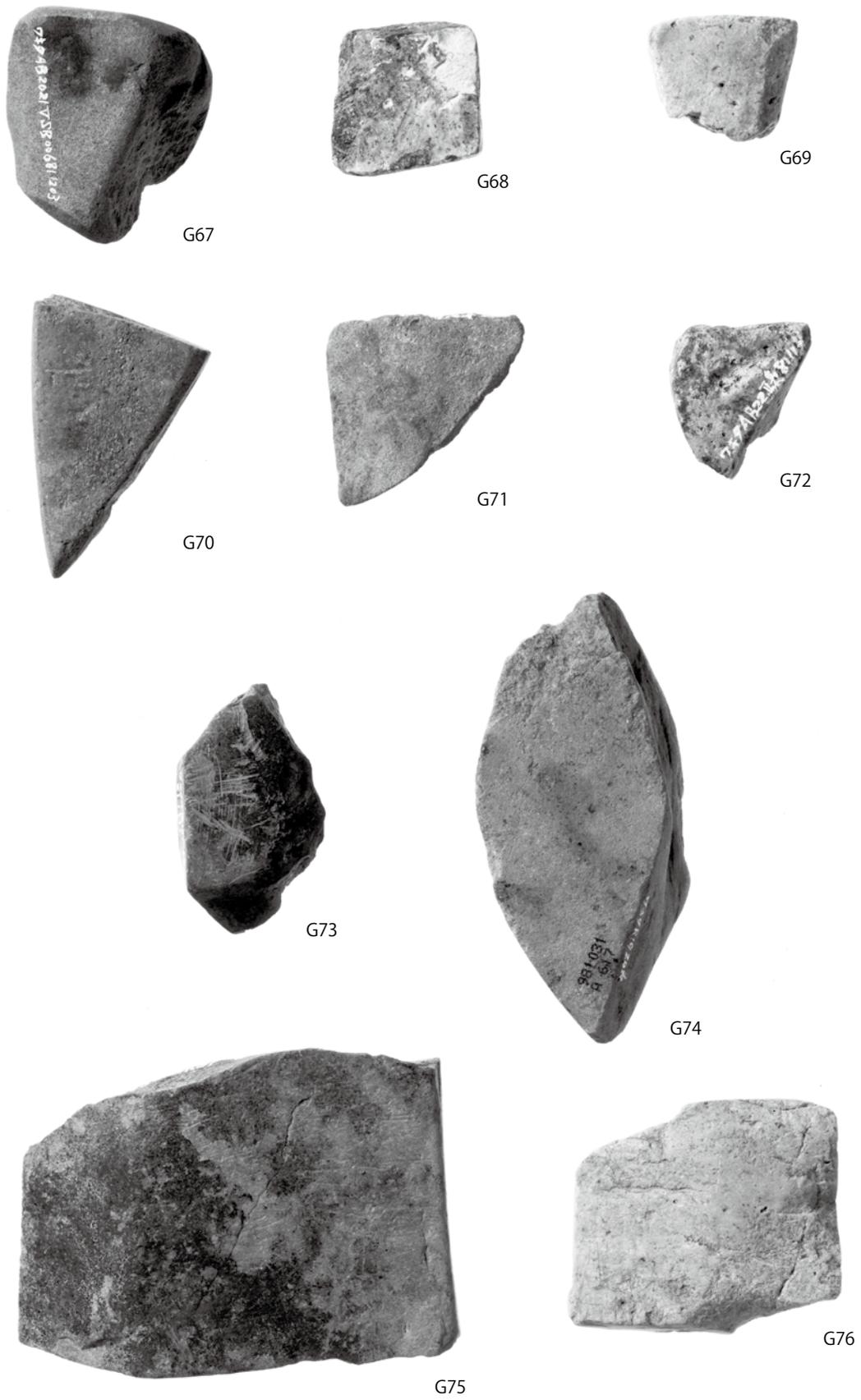


写真2 脇田遺跡出土砥石(2)

mm に渡って、両面ともに面取りを行い、刃を形成しているようである。

G159 は身部断面が 9×3 mm の長方形である。身部中ほどから幅広となり、刃部下端は幅 1.15cm である。ただし鉄釘の可能性も残る。G160 は、身部断面が長方形で幅広の形態である。身部から刃部にかけて幅を広げた後、刃部下端にかけて直線的に垂下する。

鉄釘 鉄釘はいずれも身部下半部が欠損する。大型のもの (G138) と小型のもの (G148・144・141・140) が存在する。

G138 は大型であり、残存長 13.0cm を測る。頭部が、身部に対して傘状に張り出し、円頭状を呈する。また、身部断面は方形である。

G148・144 は頭部が逆 L 字状に張り出す。身部断面は方形である。G141 は頭部が逆 L 字状に屈曲する。身部断面は長方形であり、途中で関部を持つ。G140 は頭部が傘状に大きく張り出し、身部断面は方形である。

不明鉄器 その他、特徴的な鉄器片を報告する。

G161 は不定形な板状鉄器であり、実測図下部が丸く括れる。鞍の座金具の可能性はある。

G135 は角丸長方形の板状鉄器であり、上端部がやや欠損する。表面に有機質状の遺物が錆着するが、明瞭には観察されない。断面は長方形であり、雲珠・辻金具に伴う足金具の可能性はある。

G162 は爪形の板状鉄器であり、上端部がやや欠損する。表面に鋸のような痕跡が観察されるが判然としない。断面は長方形であり、雲珠・辻金具に伴う足金具の可能性はある。

G163 は棒状の鉄器である。錆化により表面が剥離し、ほぼ全面が破面である。実測図上部に向かって厚みが薄くなり、括れる。轡の引手、もしくは鉄鉗の部材の可能性が考えられる。

G143 は断面方形の 3 本の棒状鉄器が重なって錆着している資料であり、残存長 6.4cm である。G149 は断面長方形の棒状鉄器であり、実測図下部に向けて幅・厚みを狭める。鉄鏃の茎の可能性はある。G147・145 は円形の頭部を持つ棒状鉄器で、断面方形である。

(2) 資料の出土位置と帰属時期

つづいて、各遺物の詳細な性格と帰属時期について、出土位置別に検討を試みたい(表 4)。前述のように 8・9 区 (I 群)、17～21 区 (II 群)、28～30 区 (III 群) に住居群が区別されており、以下もこの群別に詳述する。

I 群 完形の鑿 (G137)、棒状鉄器 (G163) が出土している。G137 の位置づけを考えるにあたり、古墳・鍛冶関連遺跡において出土している短群鑿¹⁸⁾ の集成及び比較を行ったところ (表 3・図 14)、G137 は通常の資料と近似した形態を持つため、本遺跡の金属器生産の時期に伴う遺物と見て問題ないとする。法量に着目すると、時期が下るにつれ、全長が短くなり、断面が長方形化する傾向が見られた (図 15)。短群鑿は古代になると、幅 3 cm 内外にやや幅広化することが指摘されており¹⁹⁾、本資料は 6 世紀以降に帰属する可能性が高い。

II 群 鉄斧 (G136)、鉄釘 (G148) の他、SK243 から撥状の刃部を有する鑿・鑿 (G139) と鉄釘 (G138) が伴出する。G138 の鉄釘と認定した資料については、奈良県五条猫塚古墳において出土している長大な鑿と法量が近似するため、鍛冶具である可能性も残る²⁰⁾。G136 の有肩鉄斧については野島永氏分類²¹⁾ の IV 式に該当し、中期後半以降通有となる形態である。

III 群 鉸具 (G132)、板状鉄器 (G135) が出土している。板状鉄器については、先述のとおり形態から辻金具・雲珠に伴う足金具の可能性が考えられ、鉸具が近接して出土していることから、その蓋然性を高める。

出土位置不明 G162 についても、爪形足金具の可能性はある。板状辻金具に伴う爪形足金具は、5 世紀後半を契機として大型化することが指摘されており²²⁾、G162 は 5 世紀中葉～後半の出土例と近似した形態を持つ点が注目される²³⁾。G161 についても、座金具と仮定すれば、栗実形もしくは楕円形を呈する初期の出土資料と近似するため²⁴⁾、時期としては 5 世紀代に遡る可能性もある。

また、正確な出土位置は不明であるが、pit1 から細形の鑿・鑿 (G142) と棒状鉄器 (G143) が伴出する。G142 のような刃部に肩を有する特徴は、5 世紀代の鍛冶遺跡である大阪府葦屋北遺跡の有袋鑿にも見られる²⁵⁾。その他、鉄鏃 (G133)・釘等については、葛城地域の古墳の副葬事例を鑑みると、後期に属するものと考えられる。

以上のように、鉄器から見ると、いずれの地区も 6 世紀

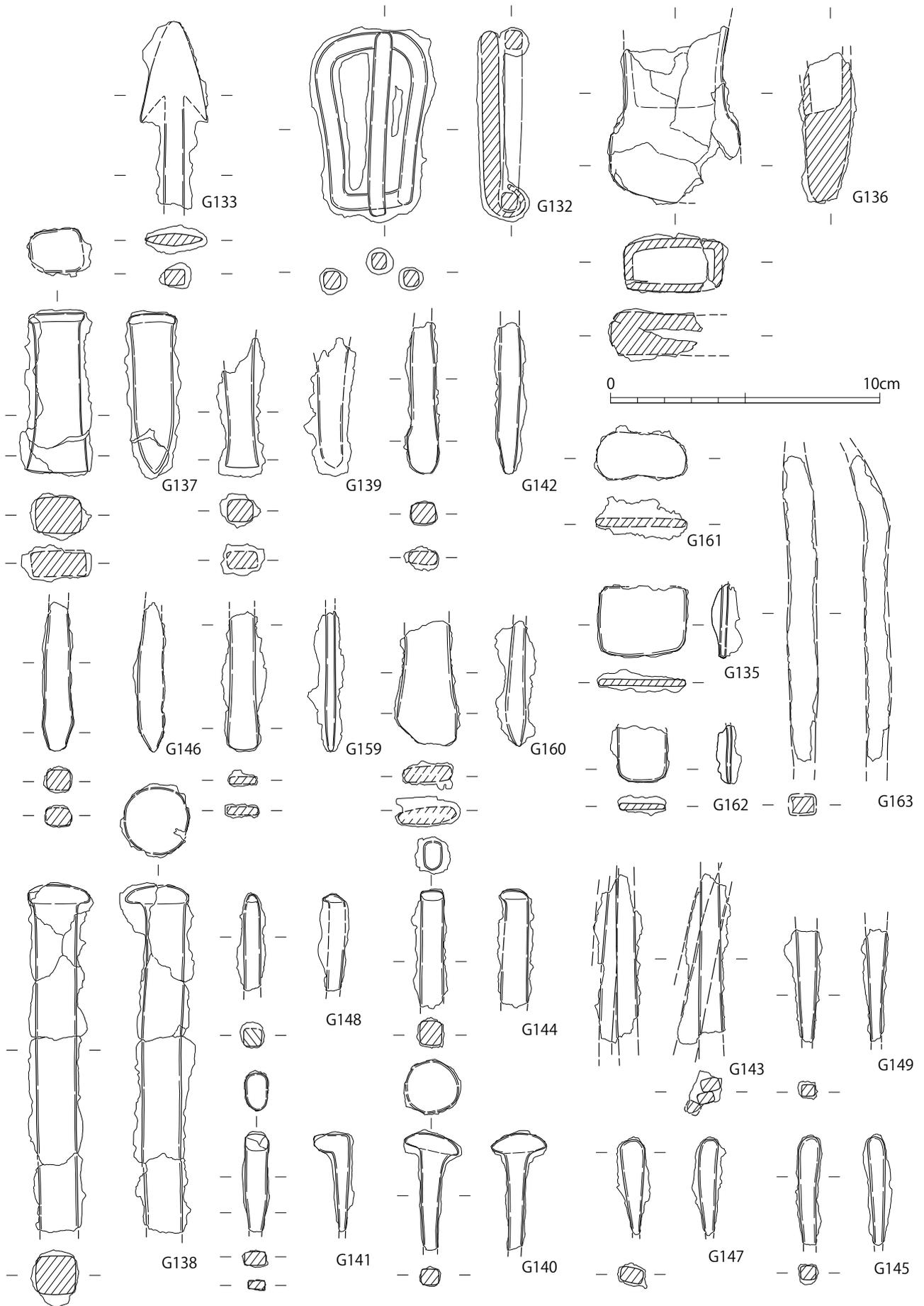


图 13 脇田遺跡出土鉄器 (S=1/2)

表3 古墳時代短群鑿集成表

| 番号 | 所在地 | 遺跡名 | 時期 | 共伴する鍛冶関連遺物 | | | | | 報告書 | 補記 | 全長 (cm) | 身部厚 (cm) | 身部幅 (cm) |
|----|-----|------------|----------|------------|----|----|------|----|---|------------------------|---------|----------|----------|
| | | | | 鉄鉋 | 鉄槌 | 鉄鑿 | アンピル | 砥石 | | | | | |
| 本稿 | 奈良 | 脇田遺跡 | — | | | — | | | 本稿 | | 6.0 | 1.4 | 1.65 |
| 1 | 静岡 | 三池平古墳 | 4C 末 | | | 1 | | | 庵原村教委 1961『三池平古墳』 | 鍛冶関連遺物なし | 10.8 | 1.2 | 1.8 |
| 2 | 福岡 | 永浦 4 号墳 | 5C 前半 | | | 1 | | | 古賀市教委 2004『永浦 4 号墳発掘調査報告書』 | 鍛冶関連遺物なし | 9.6 | 1.6 | 1.7 |
| 3 | 福岡 | 割畑 1 号墳① | 5C 前半 | | | 3 | | | 福岡町教委 1999『福岡割畑遺跡』 | 鉄鉋が出土 | 9.6 | 0.9 | 1.5 |
| 4 | 福岡 | 割畑 1 号墳② | 6C 前半 | | | 3 | | | 福岡町教委 1999『福岡割畑遺跡』 | 鉄鉋が出土 | 8.6 | 1.4 | 1.5 |
| 5 | 福岡 | 割畑 1 号墳③ | 7C 前半 | | | 3 | | | 福岡町教委 1999『福岡割畑遺跡』 | 鉄鉋が出土 | 7.9 | 1.5 | 1.6 |
| 6 | 福岡 | 野坂一町軒遺跡 | 5C 前半 | | | 1 | | | 宗像市教委 1985『野坂一町軒遺跡』『宗像市埋蔵文化財発掘調査報告書-1984 年度』 | 鉄滓が出土 | 8.1 | 1.5 | 1.6 |
| 7 | 兵庫 | カンス塚古墳 | 5C 前～中葉 | 1 | 1 | 1 | | | 富山直人 2006『カンス塚古墳』『喜谷美直先生古稀記念論集』 | | 7.5 | 1.5 | 1.7 |
| 8 | 奈良 | 五条猫塚古墳① | 5C 中葉 | 2 | 3 | 9 | 1 | 6 | 奈良国立博物館 2015『五条猫塚古墳の研究』 | | (9.5) | 1.6 | 2.0 |
| 9 | 奈良 | 五条猫塚古墳② | 5C 中葉 | 2 | 3 | 9 | 1 | 6 | 奈良国立博物館 2015『五条猫塚古墳の研究』 | | (9.8) | 1.4 | 1.6 |
| 10 | 岡山 | 西吉田北 1 号墳 | 5C 中葉 | 1 | | 1 | | | 津山市教委 1997『西吉田北遺跡』 | | 6.2 | 1.3 | 1.7 |
| 11 | 兵庫 | タンダ山 2 号墳 | 6C 前～中葉? | 1 | | 1 | | | 加西市史編さん委員会 2010『加西市史』第 7 巻資料編 1 | | (7.8) | 1.2 | 1.7 |
| 12 | 和歌山 | 大日山 70 号墳 | 6C 前～中葉 | 1 | 1 | 1 | | | 和歌山県教委 2004『岩橋千塚古墳群の調査 1』『和歌山県埋蔵文化財調査年報-平成 14 年度』 | | 8.1 | 1.2 | 2.3 |
| 13 | 福岡 | 手光南 2 号墳 | 6C 中～後葉 | | | 1 | | | 福岡町教委 1981『手光古墳群 I』 | 鍛冶関連遺物なし | 6.8 | 1.0 | 1.2 |
| 14 | 愛媛 | 塚本 1 号墳 | 6C 後半 | | | 2 | | | 松山市教委 1991『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』 | 鍛冶関連遺物なし | 7.4 | 0.8 | 1.2 |
| 15 | 佐賀 | 東十郎特別地区イ号墳 | 6C 後半～8C | 1 | | 1 | | 1 | 福岡大考研 2003『佐賀県東十郎古墳群の研究』 | | 6.2 | 1.0 | 1.8 |
| 16 | 福岡 | 花立山 4 号横穴墓 | 7C 前半以降 | | | 1 | | | 小郡市教委 2000『花立山古墳群 I』 | 2 号横穴から鉄鉋、6 号横穴から鉄槌が出土 | 6.7 | 1.1 | 1.8 |
| 参考 | 長野 | 七本松遺跡 | 古代以降 | | | 1 | | | 松本県ヶ丘高等学校風土研究部 1962『長野県東筑摩郡本郷村三才山七本松遺跡調査概報』『信濃』第 14 巻第 11 号 | 鉄滓が出土 | 5.8 | 1.2 | 2.1 |
| 参考 | 千葉 | 花前遺跡 | 古代以降 | | | 1 | | | 千葉県文セ 1984『常盤自動車道埋蔵文化財調査報告』II | | 5.8 | 0.9 | 2.9 |

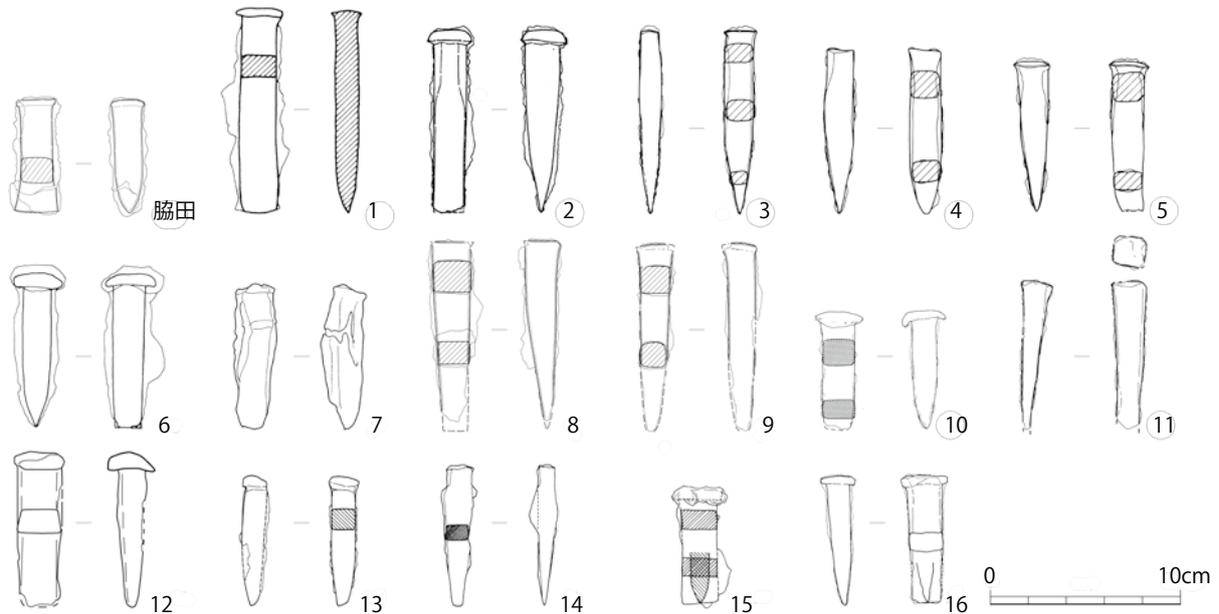


図 14 古墳時代短群鑿集成図 (S=1/4、番号は表 3 に対応)

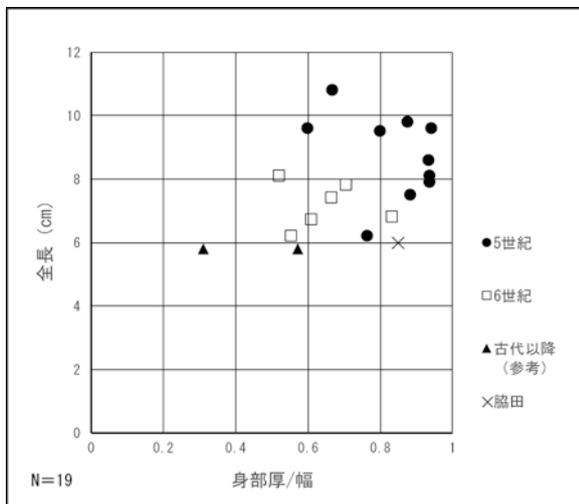


図 15 短群鑿の法量変遷

以降にかかる出土遺物が多いものの、II・III群においては一部 5 世紀代に遡る可能性がある遺物が認められた。

前稿では、各群における鉄滓・羽口の分布状況から、I 群では 6～7 世紀、II・III群では 5～7 世紀に金属器生産を行っていた可能性が示されており、鉄器で想定される時期とも整合的である。よって、これら鉄器の一部は脇田遺跡の金属器生産の所産によるものと考えられる。

(3) 脇田遺跡と寺口忍海古墳群

奈良県寺口忍海古墳群は、供献鉄滓・鍛冶具の存在から脇田遺跡の鍛冶操業集団の墓域として考えられてきた古墳群である²⁶⁾。中でも、鍛冶関連遺物の副葬が顕著に見

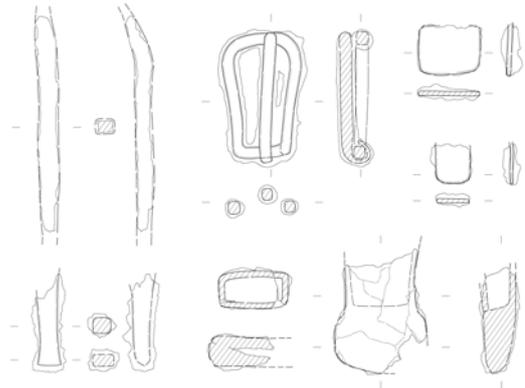
られる古墳として寺口忍海 H-16 号墳が存在する。寺口忍海 H-16 号墳の主体部は横穴式石室であり、副葬品としては耳環・馬具・工具・武器・鍛冶具・釘・須恵器・土師器・砥石が出土している。この内、鍛冶関連遺物は鉄鉗・鉄槌・鉄床・鉄鑿・砥石・鉄滓から構成され、全国的に見ても豊富な組成を持つ²⁷⁾。

H-16 号墳の出土遺物を事細かに見ると、本稿で紹介した脇田遺跡の出土資料に近似する資料が存在する(図 16)。特に、撥状の刃部を有する鑿・鑿(G139)、雲珠・辻金具に付属したと考えられる板状鉄器(G135・162)、絞具(G132)については、各々法量・形態が近似した資料が H-16 号墳から出土していることがわかる。このように、鉄器の組成からも、工房(脇田)―墓域(寺口忍海)という関係性を想定することができる。

(4) 小結

本稿では出土鉄器の帰属時期・出土位置との対応性等から、脇田遺跡において武器・馬具・棺釘等の生産を行っていた可能性を示した。特に、これまで鍛冶遺跡における金属製馬具の出土例が希薄であった奈良盆地²⁸⁾において、5 世紀代に遡る可能性がある馬具が認められたことは、中期

〔脇田遺跡〕



〔寺口忍海 H-16 号墳〕

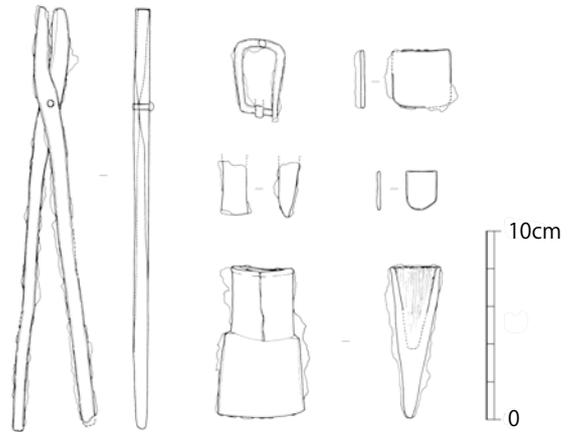


図 16 脇田遺跡と寺口忍海 H-16 号墳の出土遺物組成の比較 (S=1/4)

表 4 脇田遺跡出土鉄器観察表

| 〔鉄鑿〕 | | | | | | | | | | | | |
|---------|-----------------|-------|--------------|---------|--------|--------|---------|---------|-------|-------|---------|------|
| 報告番号 | A ランク 遺物台帳番号 | 器種 | 地区名 | 遺構・層位 | 全長 | 刃部長 | 刃部幅 | 刃部厚 | 茎部長 | 茎部幅 | 茎部厚 | 脇扶部長 |
| G133 | | 鑿 | Ⅲ区表探 | | 7.0 | 3.7 | 2.4 | 0.5 | (4.2) | 0.8 | 0.5~0.6 | 0.9 |
| 〔馬具〕 | | | | | | | | | | | | |
| 報告番号 | A ランク 遺物台帳番号 | 器種 | 調査区 | 遺構 | 全長 | 幅 | 棒幅 | 棒厚 | | | | |
| G132 | | 馬具 | Ⅳ区 A26・27・28 | | 7.0 | 4.1 | 0.6 | 0.6 | | | | |
| 〔鉄斧〕 | | | | | | | | | | | | |
| 報告番号 | A ランク 遺物台帳番号 | 器種 | 調査区 | 遺構 | 全長 | 刃部長 | 刃部幅 | 刃部厚 | 袋部幅 | 袋部厚 | | |
| G136 | | 斧 | V 区北東区 | | (7.6) | 2.7 | 4.9 | 1.8 | 3.9 | (1.9) | | |
| 〔鑿・鑿〕 | | | | | | | | | | | | |
| 報告番号 | A ランク 遺物台帳番号 | 器種 | 調査区 | 遺構 | 全長 | 刃部長 | 刃部幅 | 身部幅 | 身部厚 | 頭部幅 | 頭部厚 | 頭部長 |
| G137 | 金 4 | 鑿・鑿 | V (Ⅳ) 区表探 A8 | SD062 ? | 6.0 | — | 2.3 | 1.65 | 1.4 | 1.9 | 1.6 | — |
| G139 | 金 5 | 鑿・鑿 | Ⅳ区 A19 | SK243 | (4.8) | — | 1.2 | 1.1 | 1.1 | — | — | — |
| G142 | 金 203 | 鑿・鑿 | Ⅶ区トレンチ内 | pit1 | (5.7) | 1.5 | — | 0.9~1.1 | 0.8 | — | — | — |
| G146 | 金 325 | 鑿・鑿 | | | (5.6) | 0.6 | 1.15 | 0.9 | 0.9 | — | — | — |
| G159 | | 鑿・鑿 | | | (5.2) | — | 1.15 | 0.9 | 0.3 | — | — | — |
| G160 | | 鑿・鑿 | | | (4.6) | — | 2.2 | 1.6~2.1 | 0.6 | — | — | — |
| 〔鉄釘〕 | | | | | | | | | | | | |
| 報告番号 | A ランク 遺物台帳番号 | 器種 | 調査区 | 遺構 | 全長 | 身部長 | 身部幅 | 身部厚 | 頭部幅 | 頭部厚 | 頭部長 | |
| G138 | 金 246 | 釘 | Ⅳ区 A19 | SK243 | (13.0) | (12.3) | 1.45 | 1.45 | 2.3 | 2.5 | 0.65 | |
| G148 | 金 363 | 釘 | V 区 B18 | | (3.6) | (3.3) | 0.6 | 0.65 | 0.6 | 0.8 | 0.3 | |
| G144 | 金 495 | 釘 | | | (4.4) | (4.0) | 0.8 | 0.9 | 0.8 | 1.0 | 0.3 | |
| G141 | | 釘 | | | (3.7) | (3.0) | 0.75 | 0.5 | 1.35 | 0.8 | 0.65 | |
| G140 | | 釘 | | | (4.4) | (3.8) | 0.55 | 0.6 | 2.0 | 2.0 | 0.06 | |
| 〔不明鉄製品〕 | | | | | | | | | | | | |
| 報告番号 | A ランク 遺物台帳番号 | 器種 | 調査区 | 遺構 | 全長 | 幅 | 厚さ | | | | | |
| G161 | | 不明鉄製品 | | | 1.7 | 3.2 | 0.2 | | | | | |
| G135 | 金 316 | 不明鉄製品 | Ⅲ区 AB28-29 | | 2.4 | 3.3 | 0.2 | | | | | |
| G162 | | 不明鉄製品 | | | 2.0 | 1.8 | 0.1~0.2 | | | | | |
| G163 | | 不明鉄製品 | Ⅵ区 A6 溝西半 | | (11.5) | 1.0 | 0.8 | | | | | |
| G143-1 | 金 203 | 不明鉄製品 | Ⅶ区トレンチ内 | pit1 | (6.0) | 0.7 | 0.5 | | | | | |
| G143-2 | 金 203 | 不明鉄製品 | Ⅶ区トレンチ内 | pit1 | (6.2) | 0.6 | 0.4 | | | | | |
| G143-3 | 金 203 | 不明鉄製品 | Ⅶ区トレンチ内 | pit1 | ? | 0.5 | 0.4 | | | | | |
| G149 | | 不明鉄製品 | Ⅶ区トレンチ | | (4.3) | 0.75 | 0.75 | | | | | |
| G147 | 金 251 | 不明鉄製品 | | | (3.6) | 0.9 | 0.65 | | | | | |
| G145 | 金 274 | 不明鉄製品 | | | (4.0) | 0.75 | 0.65 | | | | | |

※単位は cm
※括弧内の法量は残存長



写真3 脇田遺跡出土鉄器

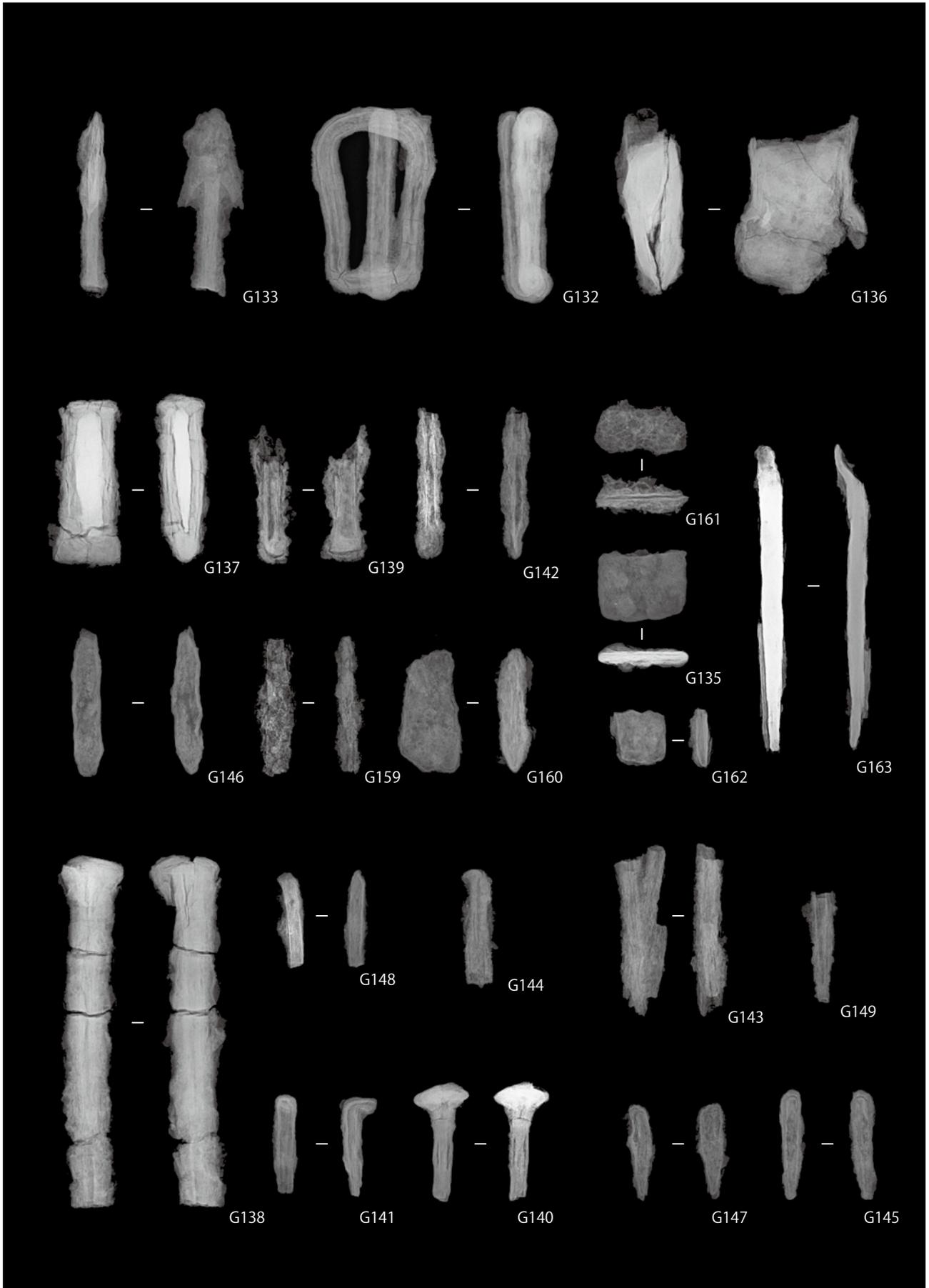


写真4 脇田遺跡出土鉄器X線写真

の近畿周辺部における金属器生産像に新たな側面を提起するものとする。

また本章では、金属器生産において使用された鑿・鑿と考えられる資料についてもいくつか抽出を行った。こうした鉄器はこれまで「不明鉄器」として扱われることが多かったため、今後、各地域の鍛冶遺跡の出土資料の再検討を行い、比較・検討を通じて、分類研究を確立する必要があると考える。

V. まとめ

以上、前稿で図を提示できなかった鞆羽口と鉄滓の図の掲載と、金属器生産関連遺物、砥石、鉄器の評価をしてきた。紙幅もないので、ここでは簡単にまとめ、次稿へつなげたい。

まずは、鞆羽口と鉄滓の分析からは、6世紀代にピークがあるものの、東紀寺遺跡出土品に類似する鞆羽口 i 群の存在から、4世紀末～5世紀初頭まで鍛冶操業の上限が遡る可能性が提示された。一方、下限についても、大型の鞆羽口が見当たらないので、8世紀代ではなく7世紀代におさまる可能性があるとして指摘した。また、埴埜・発泡土器、鞆羽口 vi 群の状況から、7世紀代には、器種は不明だが、小型の銅器を生産した可能性も示唆した。

さらに、南郷遺跡群や寺口忍海古墳群との関係にも言及し、前者は7世紀代までは鍛冶操業がおよばず、後者は6世紀中葉以降に供献鉄滓が開始されるようで、脇田遺跡は南郷遺跡群よりも長期操業で、かつこの操業のピークと寺口忍海古墳群での供献鉄滓の時期が重なるようだ。

次に、砥石の分析からは、小型品が主体で、仕上砥が過半数を占めるが、中砥、粗砥も含まれることから、金属器生産と消費地における鉄器の日常の手入れに使用されたという複合した状況を想定できる。しかし、鉄器生産の拠点を示す状況は見られないことを指摘した。

鉄器の分析からは、鞆羽口・鉄滓の出土位置・帰属時期と同様の傾向が読み取れるとした上で、短群鑿に注目し、今まで鍛冶遺跡で不明鉄器とされた中に存在する可能性があり、鉄器生産の指標の一つになりうる可能性を示唆した。また、寺口忍海 H-16 号墳出土鉄器との比較検討から、脇田遺跡で5世紀後半代に馬具生産がされた可能性も示唆した。

以上の指摘より、脇田遺跡では4世紀末・5世紀初頭～

7世紀代まで鉄器生産が継続し、農具だけではなく、5世紀代に遡る馬具生産の可能性も出てきた。また、古代寺院である地光寺の存続時期には、あわせて小型銅器の生産の可能性も出てきた。

ただし、砥石の分析からは大規模な鉄器生産が想定できないことや、前稿での須恵器の分析からは5世紀後半代の遺物が希薄なことなど、課題もたくさんある。

今後は、SX06の鞆羽口群(v群?)の整理や、鞆羽口や砥石等に対する理化学分析などを実施して、脇田遺跡での金属器生産を総括し、南郷遺跡群や布留遺跡の金属器生産との比較検討を通じて、奈良盆地における古墳時代の金属器生産の実態に迫ってみたい。

本稿は、I・V章を青柳、II章を真鍋、III章を森、IV章を線納がそれぞれ執筆した。

また、鞆羽口・鉄滓・砥石の図化には森脇智子氏、砥石・鉄器の写真撮影には佐藤右文氏、鉄器のX線撮影には奥山誠義氏の協力を得た。記して感謝したい。

註

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所 1983「新庄町脇田遺跡第2次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1981年度(第一分冊)』
- 2) 神庭滋ほか 2019「脇田遺跡の研究～奈良県葛城地域における大規模集落の様相～」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』第23集…以下、「前稿」と略記する。
- 3) 前稿の p.57 の記述を参照。
- 4) 前稿の pp.59・61 の記述を参照。
- 5) 前稿 p.63 の記述を参照。I群は8・9区周辺、II群は17～21区周辺、III群は28～30区周辺を指す。
- 6) 真鍋成史 2003「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』第7巻 小学館
- 7) 丹羽崇史 2011『飛鳥の冶金関連遺跡』飛鳥資料館研究図録 第13冊 奈良文化財研究所飛鳥資料館、丹羽崇史他 2013「古墳時代中期近畿地方における冶金生産に関する基礎的研究」『古墳時代中期の馬生産と鉄生産』(シンポジウム資料) 古代学研究会
- 8) 鈴木瑞穂・丹羽恵二 2016「桜井市上之宮遺跡(第5次調査)・安倍寺跡(第7次・20次調査)出土銅関連遺物の分析およびその概要」『纏向学研究』第4号 桜井市纏向学研究センター
- 9) 花田勝広 1989「倭政権と鍛冶工房」『考古学研究』第36巻

第3号 考古学研究会

- 10) 坂靖 2009「ヤマト王権と渡来人」『古墳時代の遺跡学』雄山閣
- 11) 以下の砥面に認められる使用痕の分類名称は下記文献によるものである。
村田裕一 2002「工具—砥石」北條芳隆・禰宜田佳男(編)『考古資料大観 第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館 pp.197-200
- 12) 前掲註 11) 文献
- 13) 砥石目は JIS (日本工業規格) により 25.4cm (1 インチ) 四方の枠を分割したふるいの目で表される。表記は「#」を用い、例えば #100 は 1 インチ四方の枠を 100 分割したふるいの目を通過できる大きさの砥粒であることを示す。
- 14) 村松貞次郎 1973『大工道具の歴史』岩波書店
- 15) 土屋みづほ 2010「砥石からみた弥生時代の社会変化」『遠古登攀—遠古登攀』刊行会 p.410
- 16) 前掲註 11) 文献
- 17) 森 貴教 2016「砥石の消費形態からみた鉄器化とその意義—弥生時代北部九州を対象として—」『考古学は科学か 上田中良の先生追悼論文集』中国書店 p.475
- 18) 松井和幸氏は、古代の鑿について、全長 10cm を基準に大・小型に分類を行っている。本章では松井氏に従い、小型 (全長 10cm 台以下) で頭部に潰れた痕跡を有する資料を「短群鑿」と呼称し、類例抽出を行った。
松井和幸 1991「古代の鍛冶具」『古文化論叢—児島隆人先生喜寿記念論集—』児島隆人先生喜寿記念事業会 pp.559-585
- 19) 前掲註 18) 文献
- 20) 表 3—8・9 文献参照。
- 21) 野島永 2009「有肩鉄斧からみた古墳時代の鉄器生産」『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣 pp.121-138
- 22) 宮代栄一 1993「5・6 世紀における馬具の「セット」について」『九州考古学』第 68 号 九州考古学会 pp.19-48
- 23) G162 に形態・法量が近似する爪形足金具の例として、愛知県志段味大塚古墳例 (全長 2.0cm、横幅 1.7cm)、京都府穀塚古墳例 (2.0cm、2.0cm)、京都府宇治二子山古墳南墳例 (1.5cm、1.4～1.6cm) などが挙げられる。
- 24) 宮代栄一 1996「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』第 3 号 日本考古学協会 pp.53-82
- 25) 大阪府教育委員会 2010『部屋北遺跡 I』大阪府埋蔵文化財

調査報告 2009—3

- 有袋鑿は大溝から 2 本出土しており、帰属時期は 5 世紀前半～後半とされている。部屋北遺跡の出土鉄製品としては、他に鑿、鉄鋸・鎌・刀子などがある。
- 26) 花田勝広 2002『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織—』雄山閣
 - 27) 新庄町教育委員会 1988『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書 第 1 冊
 - 28) 真鍋成史 2019「鍛冶を担う人々—鍛冶遺跡出土の金属製馬具を中心に—」『馬の考古学』雄山閣 pp.298-307

挿図出典

図 8

- 1：奈良県立橿原考古学研究所 2002「東紀寺遺跡試掘・発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 2001 年度 (第一分冊)』
- 2～5：奈良県立橿原考古学研究所 1996『南郷遺跡群 I』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 69 冊

図 9

- 1～4：吹田市教育委員会 2005『垂水遺跡発掘調査報告書 I—垂水遺跡第 24 次発掘調査—』
- 5～9：埋蔵文化財天理教調査団 2012『布留遺跡柢之内 (樋ノ下・ドウドウ) 地区発掘調査報告書遺物編』考古学調査研究中間報告 26
- 10～12：群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『三ツ寺 I 遺跡—上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第 8 集—』
- 13：東大阪市文化財協会 1999『鬼塚遺跡第 13 次 (遺物編) 15 次発掘調査報告書』
- 14：財団法人桜井市文化財協会 1990『上之宮遺跡第 5 次調査概要』桜井市内埋蔵文化財 1989 年度発掘調査概要 2
- 15～19：前掲註 7) 丹羽 2011 文献